



## 屋根職人の技と心意気

松本 侑壬子・ジャーナリスト

冬温かく夏涼しい、自然の素材を組み合わせた知恵がいっぱいの建築—茅葺屋根の民家は、かつては日本の農村の原風景であり、生活文化の原点でもあった。今では農山村の人口激減と高齢化、ダム開発による集団離村や宅地造成、生活様式の変化などで、急激に失われている。

本作は、かつて「芸州屋根屋」として知られた広島県西部（芸州）の茅葺職人の、今に生きる高い技術と心意気を収めた貴重な記録映画。また、九州から近畿地方に及ぶ出稼ぎ屋根職人の足跡をたどる“ロードムービー”でもある。

青原さとし監督（撮影・構成・語り）は、まず農村の四季の風景にじっくりとカメラの焦点を合わせる。煌く水田の中のおたまジャクシ、垂れる稲穂、雪帽子を被った茅葺屋根…はっとする美しさだ。明治時代後期から昭和30年代まで、隆盛を極めたという芸州茅葺職人の表情はみな明るい。「何せ50年も前のことだから」と言いながら納屋から取り出した鋏、手板、鎌、カマバリなどの道具類は、じっくり使い込んである。

明治時代の村ごとみんな茅葺屋根の写真、戦後の農地解放で瓦屋根が増え、昭和30年代にダム建設工事のブルドーザーで取り壊される茅葺民家、住む人のいなくなった無人の廃屋、ビルや瓦屋根に取り囲まれた茅葺屋根。その後も山陽新幹線開通、中国自動車道開通、山陽道全面開通、

アストラムライン開通…と交通網が広がるのと平行して次々に宅地造成も進んだ。今、同県内で人の住む茅葺の民家は約200棟まで減った。

淡い12月の陽の下で、東広島市志和堀地区の現役職人・石井元春さんが茅を刈り、茅塔にして乾燥させている。翌春、20年ぶりに葺き替える屋根のための準備である。屋根葺きはかつては村中の共同作業だったが、現在は腰蓑のように大量の縄をベルトにぶら下げた石井さんが、一人で屋根へ上る。葺き替え屋根は、まず茅へぎ（取り除き）から。葺き終わり、軒先を切り揃えた屋根の断面は、麦藁、稲藁、茅とまるで地層のように幾層にも重なっている。監督は撮影しながら、屋根の葺き方の方法や出稼ぎと村の共同体生活のメカニズムなどについて“発見”し、見る者に語りかける。率直でよく整理された語り（主観）と的確な映像資料（客観）とがあいまって、茅葺屋根や職人の世界が生き生きとよみがえってくる。

失われゆく農村の風景は、人々の暮らしの流儀の変遷の反映に他ならない。それでも、高度経済成長期には一人もいなかった若い職人が村に住みつき始めた。大学で建築や環境問題を学んだ若者たちだ。そうした新しい時代の手応えをベテラン職人の石井さんは、「（茅葺屋根は）残るじゃろう。今残している家は自慢で残しとる。ゼニカネじゃない、古いものを残したいという気で、自慢して残しとる」と評価する。茅葺屋根の再評価につながるだろうか。

映画が温かく胸を打つのは、茅葺屋根への郷愁からだけではない。知恵の限りを尽くし農家の暮らしを守った農民の技術と生き方への謙虚な共感と、地球環境の危機に臨む現代への、祈りのような問いかけが、画面から伝わってくるからだろう。

\*公開・上映に関する問合せ先

TEL 082 - 871 - 3085（青原さとし監督）

## 『藝州かやぶき紀行』

記録映画(90分) / 青原さとし監督

ポレポレ東中野(東京)で6月27日まで公開

